



長尾和宏 (ながお・かずひろ) 医学博士。東大第一病棟、大阪大第二病棟、長尾クリニックを開業。外来診療を目的とする。平成17年、単行本『臨終図巻』として出版。関西国際大学客員教授。

147 画家 筒井伸輔

小説家の筒井康隆氏と「安楽死」について週刊誌で対談をさせて頂いたのは3年前。その日をきっかけに、筒井先生の大ファンとなりました。作品を何冊も読みました(私が書いた『小説・安楽死特区』も少なからず先生の影響を受けています)。ブログ(偽文士日録)もよく覗くように。そして先日、ご息が逝去されたと知りました。

画家として活躍していた筒井伸輔さんが、2月24日に亡くなられました。享年51。死因は食道がんです。

以下、康隆先生のブログから引用させていただきます。

〈現在、喪の作業の第二段階にいる。息子の筒井伸輔が死んだ。(中略)。以前からものが食べにくく、自分で勝手に逆流性食道炎などと決めて医者にも

行かなかつたのだが、とうとうものが食べられなくなり、近所の医者に行ったら食道がんが発見された。大きくなっていて、今までよくものが食べられましたねと医者が驚いていたらしい。すぐに病院へと言われて、ある人に紹介されたがん研有明病院に行き、検査を受けたのだが、あれから一年足らず、こんなに早く死ぬとは思わなかった。本人もそう思っていたらしく、映画のビデオを沢山買い込んでいた。〉

同ブログによれば、伸輔さんは2月23日の夜に突然血を吐いて苦しんだし、救急車で神奈川県内の病院に運ばれたといいます。

翌日、筒井先生夫妻はお住ま

いの神戸から駆け付けました。が、最期には間に合わず、東京駅に着いたときに、伸輔さんの奥様からの電話で死を知らされたそうです。

食道がんは、初期の段階ではほとんど症状が生まれません。しかし胃がんや大腸がんよりも進行が早く、タチの悪いがんの種類に分類されます。

食道がんは、扁平上皮がんと、腺がんの二種類に分けられます。日本人の場合、圧倒的に扁平上皮がんが多いのですが、先のブログから察すると、伸輔

さんは腺がんだったのかもしれない。食道の腺がんは、逆流性食道炎が続いて、胃酸によって食道に炎症が起こることを背景にがん化するタイプで、欧米人に多いとされています。

慢性的な逆流性食道炎を、軽く考えてはいけません。食べ物が戻ってくる人、酸っぱいものがこみ上げる、胸やけが続くという症状がある人は放置せずに勇気を出して内視鏡検査を受けてください。

一人息子に先に逝かれた筒井先生の気持ちは如何ばかりか：以前、新聞連載『聖痕』を書かれていた時、挿画を担当したのが伸輔さんでした。昆虫をモチーフにした魅惑的な抽象画を覚えています。

小説家の父と画家の息子が作品を作り上げていく：親子の濃密な時間を羨ましく思います。伸輔さんは、画集の出版や個展も控えていたとのこと。芸術という絆で、父子は永遠に繋がるのでしよう。



撮影・長塚秀人(Courtesy of Mizuma Art Gallery)

慢性的な逆流性食道炎を軽視しない